

## 高校生の友人関係とコミュニケーション, いじめ経験, 自尊感情との関連

重 廣 奈 緒 子

### 問題・目的

近年, いじめの深刻化が指摘されており, いじめ支援に繋がる知見が必要とされている。

いじめと関連するものとして, 友人関係の変化が挙げられる。従来, 小学生で見られるギャング・グループや中学生で見られるチャム・グループの仲間関係内の異質性の排除がいじめに繋がり, ピア・グループの高校生は異質性を認める事ができる為にいじめは起こりにくいとされてきた(保坂・岡村,1986)。しかし, 現代の高校生はチャム・グループの特徴が見られるとされ(保坂,2010), 高校生のいじめの心理的背景は従来とは異なっていると考えられる。

さらに, 現代の中学生の友人との付き合い方はメディアを通して身近にいること(高石,2006)とされていることから, 情報媒体の使用がチャム・グループに特徴的な密着性に強く関与していることが注視されている。

加えて, メール, インターネット, LINEを使いたいじめが報告されており(文部科学省,2011など), 友人関係, いじめ, 情報媒体を使ったコミュニケーションのあり方の関連が考えられる。

また, 友人関係といじめ経験の双方と関連するものとして自尊感情が挙げられている(小塩, 1998;山本,2007)。

これらのことから本研究では高校生を対象とし, 友人関係の捉え方に加え, 性差を踏まえ, コミュニケーション頻度, いじめ経験, 自尊感情との関連を検討することを目的とする。

### 方法

**研究対象者** A公立高校の1,2年生を対象として質問紙調査を行い, 374名(男子141名,女子224名,不明9名)のデータを回収し, 回答数から370名を分析の対象とした。

**調査日時** 2013年7月

**手続き** 調査の実施や内容について, 事前に指導教員を通して高校の担当者と調整を行った。

**倫理的配慮** 協力は任意であり匿名であることなどを紙面にて説明した。質問紙の配布・回収は高校の教員を介して行い, 回答が見られないよう封筒に入れ封をするようにした。いじめ経験の質問は, 「過去に経験した友人関係のトラブル」とし, 協力者の精神的負担にならないように配慮を行い, 回答は強制でないことを再度紙面に記載した。

**質問紙の構成** ①フェイス項目: 学年・性別②情報機器に関する質問③友人の属性・関わり方: 3名の親しい友人の, 性別・年代・属性・直接話す頻度・メール, LINE頻度の選択, 仲の良さの順位付け④心理的距離尺度(10項目): 金子(1989)が作成したものを石本ら(2009)が4件法に変えたもの⑤同調性尺度(9項目): 石本ら(2009)が先行研究を参考に項目数を加え4件法で作成したもの⑥内的作業モデル尺度のうちアンビバレントに該当する下位尺度: 詫摩・戸田(1988)の成人愛着内的ワーキングモデルのうち, 該当する6項目⑦いじめ経験: 文部科学省(2011)の「いじめの態様」の12項目に, LINEなどに関する4項目を追加し作成した計16項目。「目撃した事がある」「した事がある」「された事がある」の経験の内, 該当する内容の選択⑧東京都版自尊感情尺度: 伊藤・若本(2010)の22項目, 4件法から成る尺度を用いた。

### 結果と考察

#### 1) 性差との関連

**いじめ経験**  $\chi^2$ 検定の結果, 「目撃したことがある加害性の高いいじめ」( $\chi^2(1) = 17.19$ ,  $p < .001$ ;  $t = 4.15$ ,  $p < .01$ ), 「目撃したことがあるLINEを使った関係性攻撃」( $\chi^2(1) = 6.69$ ,  $p < .05$ ;  $t = 2.59$ ,  $p < .01$ ), 「したことがある加害性の高いいじめ」( $\chi^2(1) = 11.67$ ,  $p < .001$ ;  $t = 3.42$ ,  $p < .01$ ), 「したことがある直接的な関係性攻撃」( $\chi^2(1) = 10.86$ ,  $p < .001$ ;  $t = 3.29$ ,  $p < .01$ )の全てにおいて, 「経験がある」の回答者は男子に多く, 「無回答」の者は女子に多かった。

**心理的距離**  $t$ 検定の結果、女子は男子よりも得点が低く、心理的距離が近いことが示された ( $t(355) = 5.94, p < .001$ )。

**同調性**  $t$ 検定の結果、有意差は見られなかった ( $t(254) = 1.55, n.s.$ )。

**アンビバレント**  $t$ 検定の結果、有意差は見られなかった ( $t(358) = 1.54, n.s.$ )。

**順位づけ**  $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2(8) = 12.28, n.s.$ )。

**実際に話す頻度**  $\chi^2$ 検定の結果、有意な差が見られ ( $\chi^2(4) = 29.89, p < .001$ )、「顔を合わせるたび」において女子が多く ( $t = 4.59, p < .01$ )、「1日に1~2回程度」 ( $t = 3.53, p < .01$ )、「2~3日に1回程度」 ( $t = 2.26, p < .01$ )、「1週間に1回程度」 ( $t = 2.79, p < .01$ )において男子が多く、女子の方が男子よりも親しい友人と実際に会って話す頻度が高い結果となった。

**LINE利用頻度**  $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2(4) = 3.41, n.s.$ )。

**自己評価**  $t$ 検定の結果、女子の方が男子よりも有意に得点が高い結果となった ( $t(228) = 3.02, p < .01$ )。

**自己決定力**  $t$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $t(234) = .62, n.s.$ )。

**自己受容**  $t$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $t(349) = .59, n.s.$ )。

これらのことから、コミュニケーションにおいて女子は親密性を求め直接話す頻度が多くなると考えられる。自尊感情の自己評価は女子が高く、先行研究と異なる結果となった。いじめ経験では、男子は加害性の高いいじめが女子よりも多く、先行研究と一致した。

## 2) 友人関係観群との関連

**友人関係観群の抽出** 心理的距離、同調性、アンビバレントより、友人関係の捉え方を「友人関係観」とし類型化した結果、「尊重・アンビバレント低群」「尊重・アンビバレント高群」「密着・アンビバレント低群」「密着・アンビバレント高群」「孤立・アンビバレント低群」の5群が抽出された。

**性差**  $\chi^2$ 検定の結果、3群に有意な性差が見られ ( $\chi^2(4) = 17.39, p < .01$ )、「尊重・アンビバレン

ト低群」 ( $t = 2.14, p < .05$ )と「密着・アンビバレント低群」では女子の方が多く ( $t = 2.67, p < .01$ )、「孤立・アンビバレント低群」では男子の方が多く ( $t = 2.52, p < .05$ )ことが示された。

**いじめ経験**  $\chi^2$ 検定の結果、「されたことがある加害性の高いいじめ」経験は ( $\chi^2(4) = 11.97, p < .05$ )、孤立・アンビバレント低群で「無回答」の者は「されたことがある」と回答した者よりも有意に多く ( $t = 3.15, p < .01$ )、「されたことがある直接的な関係性攻撃」経験は ( $\chi^2(4) = 9.96, p < .05$ )、密着・アンビバレント高群で「されたことがある」と回答した者が「無回答」の者よりも有意に多い ( $t = 2.71, p < .01$ )ことが示された。

**順位づけ**  $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2(28) = 24.71, n.s.$ )。

**実際に話す頻度**  $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2(16) = 22.27, n.s.$ )。

**LINE利用頻度**  $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は見られなかった ( $\chi^2(16) = 21.24, n.s.$ )。

**自己評価** 一元配置分散分析の結果、有意な差は見られなかった ( $F(4, 317) = .67, n.s.$ )。

**自己決定力** 一元配置分散分析の結果、有意な差は見られなかった ( $F(4, 317) = 1.12, n.s.$ )。

**自己受容** 一元配置分散分析の結果、密着・アンビバレント高群よりも密着・アンビバレント低群の自己受容が高かった ( $F(4, 317) = 2.98, p < .05$ )。

これらのことから、孤立群は加害性の高いいじめ被害を経験しやすい可能性が考えられる。密着高群では、アンビバレントの高さが直接的な関係性攻撃の被害経験と関連し、加えて、密着した友人関係において、アンビバレントな心性が自尊感情に作用していることが明らかとなった。

## 総合考察

**臨床心理学的意義** いじめ支援に繋がる知見として、孤立しアンビバレントの低い友人関係観を持つ者のより深刻ないじめを経験する可能性の予測や、過去のいじめ経験による潜在的なリスクの把握が可能となる。密着した友人関係観を持つ者は、アンビバレントな心性に着目することで自身への肯定的な感情の維持・向上に繋がることが考えられた。